牢獄の出逢い

シェリー酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
牢獄の出逢い

【Ｎコード】
Ｎ９１５８Ｚ

【作者名】
シェリー酒

【あらすじ】
異世界召喚もの。美形人外×選ばれなかった平凡少女が出逢うお話。

一話

静寂。
風のない暗闇の中からくるりと身を翻すと、来訪者は慣れたように日和(ひより)にべったりとくっついた。
青白い金属のような光沢がある髪は長く、頬は高級なアンティークドールそのものの透明感を持ち、髪と同色の長い睫が青水晶の瞳をぐるりと囲む。
大柄ですらりとした痩身はふんだんに銀の装飾をまとわせた白い外套を着こんでおり、身動きするたびちらりと見える尖った耳には二匹の蛇が絡みつく銀細工が優雅だ。
悪魔的な美貌で彼が微笑んで首筋に口づけ、無邪気な仔猫のようにごろごろと懐いてくる心地よさに日和は流されそうになりながらも、いつものように力なく引き離した。

「触っちゃだめだよ」

日和は掠れる声で呟くと、辛そうにごほごほと咳きこんだ。
この地下牢に囚われて以降、看守の気が向いた時にしか薬や食料が与えられず、まともな食事を摂れていないため、いつの間にかすっかり痩せてしまっている。罪びとの着るような薄い衣――以前いた世界の病院でよく見かけた入院服に似ている――からは腕や足が剥き出しになっており痛々しい。また青黒い痣のようなものが皮膚の内側からいくつも浮かび上がり、痣そのものが生きているかのように時々ビクリと脈打つのが何とも不気味だ。

「病気が感染(うつ)っちゃうから、もう来ないでって言ったのに」

日和はそう言い、宝石のように光る彼の瞳から目を背けると、また

じっとうずくまった。

二話

日和が原因不明の病を発症し、この地下牢に隔離という名の幽閉をされる身となってから、彼――青蛇〈ブルゥ・サーペント〉という種らしいゲブがいつからかやって来るようになった。

ゲブは人間なんかほんの人睨みで殺してしまえるほど高位の魔物らしいが、そんな素振りを一つも見せず、毎夜当たり前のように現れ甘く微笑み、日和にくっついてくるだけで後は時々世間話をする程度。

もちろん日和だってそれなりに見知らぬ不審者に対する警戒心は持っていた。そう、彼の出現に初めはものすごく驚き、怯えたのだ。鉄格子を開けて入ってくるならともかく、いきなり同じ牢の中にぽんと現れたのだから、当然恐慌状態になり思わず泣き叫んでしまったくらいだ。

しかしゲブは平然と日和のパニックが収まるまでごろんと寝転がり、じいっと見つめてくるだけで、その時はほんの数分経つとまた現れた時と同じくぽんといなくなった。そんなことが何度も続けば自然に恐怖心も薄れるというもの。

ゲブは十話しかけたところでようやく一返すかどうかといった極端に無口な男（名前を知るのに一週間はかかったのだ）だが、誰も見舞いになど訪れてくれることのない寂しい牢獄では、ろくに喋らずともこうして傍にいてくれるだけで心強い。

この薄暗い世界の中で、日和にとってゲブだけが救いだった。

三話

一体なぜこんなことになってしまったのか。日和は牢獄の中、幾度も考える。

これまで特にこれといって良いことも悪いこともしていないし、トリップ物のテンプレートである不思議な物を拾ったり事故に遭ったり前世の記憶があるとか……そういう特別な出来事は一切なかった。

そう、日和は毎日なんの変哲もない日々を過ごしていたのだ。

そうして訪れた運命の日は、一年ほど前だったか。

あの日、二人は姉妹で映画を見に出かけていた。

妹日和は、姉あずさが彼氏との約束をドタキャンされたから、という理由で、ちょうど封切りされたばかりの興味のない恋愛映画を見に連れて行かれたのだった。

「一人で見るのなんて嫌だもの」

そう言い笑う同い年の姉は妹の目から見てもとびきり綺麗で、とても双子だとは思えない。その美貌――念入りに手入れされたシミ一つない肌、研究された清純派乙女と小悪魔レディの中間メイク、染めたばかりのふわふわしたアッシュグレイの髪。何より出るとこは盛大に出て、引っ込むところはしっかり引っ込んでいる引き締まったスタイルの良さ！――は、黒髪ストレートに眠たげな瞳の、ぽやんとした平凡な容姿にすとーんとした日本人形体型である日和の、自慢でありコンプレックスでもあった。

四話

双子といっても二卵生双生児であるため、華やかな美貌のあずさと童顔が唯一の特徴である日和はあまりにも似ていない。ゆえに日和は‘あずさ嬢の引き立て役’や‘妹ちゃんって実は貰われっこじゃないの？’なんていう口さがない言葉に、悲しいことに慣れっこになってしまったくらいなのだ。

その映画を見た帰り道でのこと。マクドでポテトとジュース片手に熱弁しただけでは言い足りなかったようで、先ほど見たラブシーンの講釈を未だに垂れ続けるあずさへ適当に相槌を打っていると、突然花火が暴発したような激しい光りが発生した。
途端、ふわんと身体を温かく包む花の香り。甘いような、寂しいような、どこかで嗅いだことのあるような、懐かしい香り。

「見つけた……」

耳元でそっと秘密を打ち明けるかのように囁く、声だけの不思議な存在に目を白黒させ、咄嗟に振り向くとあずさは気を失ってしまったのか、ちょうど膝から崩れ落ちるところだった。
そのため日和は慌てて姉の身体を支えるが、花の香りと不思議な声が体中に浸透してきて、じわじわと胸に訴えかけてくる覚えのない懐かしさに不安になる。しかしどうしても気になってしまい、一体何を見つけたっていうの？　と心の中で呟いた瞬間。

五話

日和の疑問に応えるようにますます光りは眩さを増し、次第に轟々とざわめく渦となり、暴力的なまでの光の粒子に抗いきれずするりと飲み込まれ、そのまま二人ともどこか――つまり別世界――へ転移させられていた。

□　□　□

はっと意識を取り戻すと、二人は一段高くなったところで、直径三メートルはありそうな血で描かれた魔法陣のようなものの中央に座りこんでいた。魔術の道具であるらしき、薄汚れた小壜や鏡の欠片に白いオールドローズ、動物のものらしき髑髏の眼窩は洞穴のように暗くこちらを睨んでおり、絞められて事切れた鳩それに古びた銀貨など、いかにもそれらしいアイテムが何らかの法則に従って配置されている。従って、どう楽観的に見ても怪しげな儀式を行っていたとしか思えず、不気味である。

彼女たちから少し離れたところでは、刺繍の鳥の嘴部分にきらきらとした石を一つ縫い取った腕章を付け、純白の法衣を着こんだ幾人もの神官たちがぐるりと取り囲むようにして頭（こうべ）を垂れ、跪いている。日和は有名なファンタジー映画で見たことのある、いわゆる黒魔術を連想させるその異様な雰囲気と、彼らが俯いているためよく見えるその髪の毛――赤毛や茶髪はともかく、緑やピンク色してるとかあり得ない！――に怯え、呆然として隣にへたりこんでいる姉の腕をぎゅっと掴んだ。

六話

二人の目の前には豪奢な赤い外套に黒い襟巻をつけている小柄な男――というより少年と言った方が正しいほど若々しい――がいた。星の光を紡いだような金髪に、花の顔（かんばせ）へ見事な赤瑪瑙を嵌めこんだかに見える瞳の持ち主であるが、何かの儀式を行っていたらしいこの場所には不釣り合いな姿ではある。

彼は目の前に二人の少女がいることに一瞬驚いたように目を瞬いた後、ちらっと僅かに見比べてから、迷わずあずさへと手を伸ばした。彼の背には天使を連想させるような、小さな白い翼があった。

「美しき異邦の女神……白薔薇の乙女よ、そなたを待っていた」

ある特有の目的を果たすためだけに造られた、この演劇ホールのようにがらんとした石造りの建物の中、よく響き渡る彼の声を聞き日和は何故か不思議なほどどきりと胸が高鳴り、息ができなくなるような切なさを感じた。つい先ほどこちらに来る前の激しい閃光の中で嗅いだ、知らぬはずの懐かしい香りと似たものを感じたのだ。

しかし彼に見つめられながら手を差し伸べられたあずさも好ましいものを感じ取ったようで、くるりとした大きな瞳を潤ませ、ぽうっとした顔をしておとなしく彼へ手を引かれるがまま立ち上がり、そのまま優しく抱きしめられていた。その姿は、少女に祝福を授ける天使の絵画のように映り、怖いくらいに、お似合いだった。

七話

そうして二人ともこの怪しげな神殿のような場所から出て、王宮らしき場所へ連れて行かれた。もちろんあずさは赤瑪瑙の瞳の彼にエスコートされながらだったが、日和の相手は言わばその他大勢である、腕章をつけた法衣をまとった神官であり、姉妹は別々の相手と共に、別々の部屋へ入室したのだった。

それ以降、日和はあずさに会うことはおろか手紙を渡すことでさえ一度たりとも許されず、己の身の丈を学ぶことを強いられた。当然ながらこちらの世界、そして召喚された場所であるこの国のことを全く知らないため、日本式で例えるならアイウエオの字の書きとりや、幼い子供でさえ知っているような一般常識から、王宮では当然必要とされるテーブルマナーや淑女の振る舞い方など、この国そして王宮内で生きていくために必要だと思われる多岐に渡る知識を徹底的に教え込まれた。自分の現状を把握し、これからどう過ごせばよいのかということを理解させるために。

教育係としてつけられた年配の官女は、優しいとか怖いとかいう感情的な面を一切覗かせない機械人形のような女だったが、拝命した任務に忠実であれとする気質を持っていたため指導を怠ったり嘘を吐くことはなく、凍った表情筋で淡々と真実を教えてくれた。

八話

曰く、ここは日和たちの住んでいた世界とは異なり、短命種であるヒトの上に神聖なる古代種の王族が君臨する秀でた世界であって、特にこの国の場合は魔術が独自の発展を遂げており、一方向のみだが別次元に対する召喚を行うことができ、栄誉ある王族の婚姻相手を呼び出すという古き慣習が根付いていること。

曰く、召喚時にあずさの手を取った天使〈ブラァド・ピジョン〉は我らが銅鳩国の誇り高き王太子殿下であり、彼のためにこの祝福された地へ召喚されたあずさは彼の妻、将来この国の王妃となる高貴なる身の上の方となったこと。

曰く、異世界召喚は毎回立太子の儀と共に行われているが、術式には何の間違いもないはずなのに何故か数百年に一度くらいでしか成功しないため、異邦の花嫁は百年の幸いをもたらすというお伽話のような言い伝えがあること。

だから今回の召喚成功を国民は大いに歓迎し、城下では気の早い住民たちが女神の来訪を祝うパレードを催しているだけでなく、他国からの女神に対する関心も急激に高まっていること、を知った。

また二人同時召喚はただの失敗に過ぎず、日和は女神と双子であるという特殊な関係であるために間違って共鳴した結果紛れ込んでしまっただけで、遺憾ながら一度こちらに来てしまった存在を元の世界に戻す方法はないのだと。

九話

こうして姉にいかなる接触行動も起こすことを禁じられ、初めのころは教育係の老いた官女に日本語でしたためた手紙を姉に渡してくれるよう頼み、懇願し、怒鳴り、ついには殴りかかったところで、あっさり魔術で捕縛されたことがある。いかに見た目が非力であっても、能力はその通りではないのだ。もちろん隙をついて与えられた部屋から逃げ出そうとしたこともあったが、特定の者のみしか開けられない扉であったため、もはや完全なる軟禁である。

よって、生きるために食事をとったり眠ること以外には、おとなしく官女から有り難いお話を聞き、栄えある銅鳩国のヒトになるための教えを受け入れるくらいしか、日和にできることは残されていなかった。

王宮では召喚後にすぐさま緘口令が敷かれたが、花嫁召喚失敗では縁起が悪いということ、何より大陸一の魔術式を操る国としての面子を保つためにも、日和の存在を国外はおろか国内でさえも知られるわけにはいかなかったのだ。

そのため街はもとより王宮の庭――穢れなき純白の楽園と謳われている国の誇りであり、一年を通してオールドローズが咲き乱れているという話を聞き、一度見てみたいと頼んだが黙殺された――にさえ出してもらえない日々が続いたある時、いつものように与えられた部屋に籠って本を読んでいると、日和は自分の腕にいくつか小さな青いあざが浮かんでいることに気づいた。あざといっても打ち身でできるような淡い色ではなく、まるで刺青や油絵の具で描いたかのように不自然なほど鮮やかな青だ。

十話

今まで見たことのない群青色に言いようのない不安を感じながらも、もしかして世界による傷の出方の違いかも知れないと思い、どこでぶつけたのだろうと怖々触ってみるが、不思議と熱も痛みもない。しかし怪我をしたから治療してくれと医者を呼びつけるのは気が引けるし、自分は明らかにいない方がいい存在なのだからこれ幸いと何をされるか分からないと思い、どうするべきか考えあぐねていたら、日毎にあざの数は増え、比例するように咳がひどくなっていった。

日和が我慢の限界を超えてとうとう呼吸困難を起こして意識を失い、再び目覚めた時、そこはもう地下牢だった。

「女神さまに感染るといけないからね」

日和に対してヒトというよりまるで無機物を見るような視線を向けた、年嵩の医者らしき男は、そう言うなり、鉄格子ごしに牢の中へ申し訳程度の薬のようなものやパンを置くと、すぐに階段を駆け上がり地下牢から出て行ってしまった。質問することを許さないような、無駄のない素早さに、わたしこれでも王妃候補の妹なのにと、日和は内心ひとりごちた。

「どうして、わたしだけ……」

ちいさく呟いて、また咳をし、意識なく鉄格子のすぐ側に置かれた妙な色のどろりとしたその薬を手に取り、ぐいと一息に喉へ流し込んだ途端襲ってくる苦さに泣いた。見捨てられた……その感覚は、以前の世界ではあたたかなまどろみの中で庇護され生きてきた日和にとって、言葉にしきれぬほどの絶望だ。

十一話

その上、万が一にも逃げ出して女神さまを病気にすることがないようにと、気を失っていた間に足首には鉄球の付いた枷が嵌められており、間違ってこの世界へ呼び出された自分をこうして閉じ込めるだけで、介抱してはくれないことを知った。

□　□　□

「わたし、きっともうすぐ死んじゃうよね」

日和は優しげに見つめてくるゲブを見て、囁いた。

「薬ぜんぜん効いてないし、むしろ悪化してきてる気がするの。ねえ、ゲブ……あなたもそう思うでしょう？」

ゲブは微笑むと、長い腕を伸ばし日和をそっと抱き締め、細い首筋に口づけを落とし、ちゅうと吸いついた。日和は振り払おうとするが、今度はしっかりと離さず、何度も吸いつき、赤い花を咲かせる。

「感染るとあなたも死んじゃう……、もう近付かないでってば」

するとずっと黙り込んでいた青蛇はすうっと雪を連想させる目を細め、「死にたいのか？」と氷砂糖のような唇を動かした。

十二話

「まさか！　でもこんな状態じゃ……。病気治りそうにないし、もう、仕方ないよ」

と言いごほごほと喉の奥から深く咳きこむが、そんなことにはお構いなしにそっと肩を抱いて、「助けてやろうか」、そう言い、また美しく微笑んだ。

「それ、わたしを、殺すっていうこと？　ゲブはとても強い魔物なんだって、誰かが言っていたよ。色々教えてくれたあの官女……おばあちゃん先生からかな。
でも死ぬ前に、ねえ……ゲブ、ゲブ……わ、わたし、ちょっとでいいから、おうちに帰りたかったようっ……！」

それは強制召喚後に流す初めての涙だった。王宮内ではいつでもどこでも誰かしらの監視の目が行き届いており、いつだって気が抜けず弱音なんて誰にも吐けなかった。あずさと二人、意思を完全に無視されこの世界に攫われてきたけれど、置かれている状況は全く違う。いや、これほど極端でなかったとしても、以前の世界でだってそうだった。姉は綺麗で優秀で皆に愛されているのに、自分は比べるのも嫌になるくらい平凡で、いつだって二番目にしかなれない。あずさを大好きな気持ちと同じくらい、妬む気持ちもあったのだ。
そんな永遠の二番目人生で断トツのどん底状態の時に出逢い、唯一ヒトとしての尊厳を守ってくれ、優しく接してくれるゲブによって、ようやく頑なに守ってきた心の柔らかい部分が露わになったのだった。

十三話

「……ああ、そうしよう」

「え」

「さあ、行くよ」

そう〈ブルゥ・サーペント〉は言うなり、ひっそりと口端を上げて頬笑み、コツ、コツンと規則性のない奇妙なリズムで日和の足首に嵌められている枷に指で触れ、ふっと息を吹きかけた途端、急激な変化が生じた。どんなに引っ張っても傷一つ付かなかった鉄枷が真っ黒に酸化してしまいぼろぼろと崩れ落ちたのだ。

「えっこれって外れないはずじゃ……」

つけたものしか分からない呪文を唱えなければ絶対に外れないよう調整されている魔法具だと、牢内ですることもなくボンヤリしていた時で看守に笑いながら説明された、強固であるはずの拘束具をあっさり外された。おかげでずっと引きずるしかなかった足が少し楽になり、一瞬外せるのならもっと早くにしてくれたら……と日和は愕然としたが、とっさにありがとう、と小さくこぼした。

「礼なら俺の口を」

言葉を空気に紡ぐと同時に、無邪気そうに青蛇は座っている日和がキスしやすいよう身をかがめ、ついでのようにその細い腰に腕を回してぎゅうと抱きしめた。

十三話（後書き）

すいません、ばたばたしていたので更新忘れてました（汗）。

十四話

「……わたしから？」

今まで戯れのように――高位魔物であるゲブにとって、ヒトでしかも周りから邪魔者扱いされてるわたしなんてペットみたいなものというか、そういう感覚でじゃれてきてるのかなあと内心思っていた――何度も口づけしたが、それは全部ゲブから仕掛けてきたものだったので日和は戸惑った。だがその作り物のように秀麗な顔を見つめたところ、微動だにしないことに本気を感じとり、恥じ入りながら陶器のような艶やかな唇にそっと啄ばむようなキスを落とした。しかし待ち構えていたかのように、ゲブはぐっと後頭部を押さえ込み、無理やり唇をこじ開けぬるりとしたものを侵入させた。指先では子どもをあやすように手櫛で髪を梳いているが、やっていることはとんでもない。

「んぁッ……」

歯列を丁寧になぞり上顎をたっぷり舐め、驚いて奥に引っ込んでいた日和の舌を探り当てると、ゲブは蛇族特有の先の割れた長い舌で何度もきつく絡め、吐き出せないように自分の唾液を流し込んだ。看守が席を外した牢の中、くちゅくちゅといやらしい音を響かせながらキスを続け、しばらくの間力の抜けた日和が二人の混ざった唾液を吐きだすわけにもいかず、こくこくと何度も分けて飲み込んでいるのを確認し、唇を外すとゲブは顔中にふわりとしたキスを落とした。

十四話（後書き）

感想くださった方、ありがとうございます！
どきどきして内臓口から飛び出そうになりました。
１９話で完結なので、もう少しお待ちくださいませ。
（≧≦）ノシ

十五話

「ヒヨリ。病は治っただろう？」

青白い肌がほんのり赤く染まり、今までの親鳥が小鳥を慈しむようなバードキスとは桁違いの、知らなかった新たなキスの余韻でぼんやりと潤んだ瞳を向けていた日和は、はっとして自分の体を見るとそこにはもう今まで蝕んでいた奇妙な青い痣が、すっかりなくなっていた。

「ど、どうして……」

「青き傷跡、青蛇（せいじゃ）の蠱毒（こどく）、蛇（じゃ）の道は蛇。解毒するは王族のみ」

「せ、聖者（せいじゃ）？　何のこと……」

「大したことではない。なあそれより、しばらくここに通い考えていたが、他の奴らがなぜあんなつまらぬ女を崇拝するのか解せぬ」

ゲブは雪色の睫を物憂げに伏せて、平然とぼやき、高貴なる未来の王妃の妹君が使うものとは到底思えない、牢獄ぴったりな囚人用の粗末な寝台へどしりと腰を下した。それだけでぎしりと音を立てる薄っぺらな粗悪品で、地下牢に連れてこられる前日までふかふかした羽布団の恩恵を受けていた日和には、嫌がらせだとしか思えない代物である。

十六話

「あずさがどうしてるのか知ってるの？」

「もちろん。あの鳩王子にべったりで、絹のドレスに金銀を集め、高価な香油を塗り化粧して……つまり歴代の王妃と変わらず国庫をそれなりに食いつぶす、在り来たりな女さ。」

惚れっぽい姉が、あの天使みたいな王子を好きになったことは、日和には簡単に想像できた。まず出逢いからしてロマンチックであったし、その気持ちのまま姉は突き進み王子にアタックしているのだろう。また女神と王子が仲睦ましくあるべきことに異論はないため、周りの人たちも全力で加勢しているに違いない。

ゲブは姉をつまらないと言ったが、それでも王子と並べば一対のお似合いなのだろう。

そう思うと、胸がずきりと痛んだ。

「あの鳩はお前の姉を主神〈セト〉の定めた王妃だと思っているようだが、実際は違う。

セトは元々二人ひと組で召喚させる。

だから伝承がたまたま歪められているだけで、今回の召喚は失敗しちゃいないのさ。」

思いもよらない言葉に日和はあっけにとられ、涼やかなゲブの顔を見つめた。

十七話

「二人のうちどちらが女神なのか、見分けた者だけに幸福が約束されると云われている。
だが歴代の王子は濁った魂の者ばかり選ぶ……。なんと見る目のない」

そうして見慣れた砂糖菓子のような微笑を浮かべ、日和をぎゅうと抱きしめた。

「そう思わないか？　ヒヨリ。実際、あれは面の皮一枚であの女を選んだ」

「どうし、て……まるであの時そばにいたみたいに」

「さてね。しかし選ばれなかった異邦の女神を何人も見てきた。
打ち捨てられ、病にさせられ、他国に売られ、斬首され……どいつも苦しみながら死んでいった。
そのたび俺は顔を見せ、美しい者なら持って帰ろうとしたが、気が乗らなくてね。
だって縋りついて、助けて、としか言わない奴なんて退屈だろう？」

ゲブは可愛くて可愛くてたまらない、と言いたげに、日和へ蝋のように滑らかな頬をすりよせ、病で痩せてしまった肩へ顔を埋めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9158z/

牢獄の出逢い

2012年1月14日20時48分発行